

帳のうはぶみ、本所表町の名主中田氏が所藏の水帳元祿十年丁丑十二月とあり、飾などかうがへて玄るべし。さればすみだ川ははじめは下總、中ごろは武藏、その後また下總今はむさしの名どころ也。木母寺の鐘のことがきに、武藏のくにの豊島のこほりの隅田川とあるはいとくいぶかし。延寶五年本らびし鏡銘に、武州豊島郡隅田川梅柳山木母寺と見ゆ。こは葛飾郡とあるべきことなるに、葛西本所わたりが、武藏に隸しを、豊島郡に管たるなめりと心得ひがめしがゆゑのわざなるべし。『伊勢物語』上をゆきくして、むさしの國と玄もつふさの國とふたつがなかに、いとおほきなる河あり、その河の名をばす。みだ川となんいひける。○中玄ろき鳥のはしとあしのあかきが、玄ぎのおほきなる水のうへにあそびつゝいを、くふ、京には見えぬとりなれば、みな人みしらず。わたしもりにとひければ、これなむ都鳥と申といふをきゝて、名にしおはいざこと、はむ都鳥我思ふ人はありやなしやと、とよめりければ、舟人ござりてなきにけり。

〔更科日記〕今は武藏の國に成ぬ。○中野山葦荻の中を分くるより外の事なくて、武藏と相模との中に有てあす。た川といふ、在五中將のいざこと、はむとよみけるわたり也。中將の集には、すみだ川とあり、舟にて渡りぬれば、相模の國になりぬ。

〔江戸紀聞〕<sup>五</sup>物茂卿云、武藏相模のさかひなるすみだ川といふ事は、女のかれたる物なれば、國の名書ちがへたるものなるべし。山岡明阿云、異本には、武藏と下總との間にこの條あり、さらば今の世のいひつたへにはよくかなへども、或は後人のこと更に入ちがへたることにや、多本みな武藏相模のさかひとあり、もしさこの作者、また幼穉の童女の歳<sup>今按に十三時也</sup>かきたる物なれば、聞たがへしにもあるべし。いづれか定めがたくなん、今按に、物氏の説のごとく、たゞ國の名書たがへたりといへるもうけがひがたし、前後の文を見るに、武藏野を分てこの角田川に來れり、是より相模の國に至り、唐の原など見じことをかけり、諸越の原は相模國なり、國